主体的な学びを促すアカデミック・ライティングの
段階的指導法の開発

中東 雅樹* 津田 憲子**
* 新潟大学経済学部 **新潟大学大学教育機能開発センター

1. 本発表の課題
アカデミック・ライティングの基本的指導は初年次教育として位置づけられて 2000 年代に普及し、現在はその学習・教育効果や専門教育との連関が課題とされる「転換期」にある（井下，2008）。新潟大学経済学部は 2000 年代に大学における基本的学習スキルの教授をねらいとして「スタディ・スキルズ」を開講した。授業は、基本的学習スキルの講義と図書館ガイダンスをし、実際のライティングは学生個人の経験学習に任せて評価するというスタイルで実施されてきた。しかし近年とみに、学士課程段階で修得すべきライティング・スキルが身についていないことが教員の間で問題視されるようになった。
そこで 2012 年度以降、先にアカデミック・ライティング力を身につけさせることを目的として、そのために、これまでに蓄積されてきた学外の様々な取り組み（例えば「学びを支援する」協働学習、院生チューターによるライティング支援、図書館職員との連携など）を参考にし、大学教育機能開発センターなどの学内の関連機関と連携して、抜本的に改善することに取り組んだ。
本発表は、この取り組みによって開発した「ライティングの段階的指導プログラム」の特徴と成果を明らかにする。

2. ライティングの段階的指導プログラムの特徴
ライティングの段階的指導プログラムの特徴は、ライティング・プロセス中心の協働学習ワークショップと、受講生が作成したレポートを添削補助する上級生養成「レポート添

図 改善前と改善後におけるスタディスキルズの授業内容と学習動向

<table>
<thead>
<tr>
<th>(1) 改善前</th>
<th>(2) 改善後</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>授業内容</td>
<td>授業内容</td>
</tr>
<tr>
<td>基本的学習スキルの講義</td>
<td>テーマ内容の開発ワークショップ（図書館との連携）</td>
</tr>
<tr>
<td>図書館ガイダンス</td>
<td>事前学習／協働学習</td>
</tr>
<tr>
<td>授業計画</td>
<td>报告作成計画書提出</td>
</tr>
<tr>
<td>テーマに関する</td>
<td>レポートの書き方ワークショップ</td>
</tr>
<tr>
<td>自己理解の発表会</td>
<td>協働学習</td>
</tr>
<tr>
<td>（中間報告）</td>
<td>レポート提出</td>
</tr>
<tr>
<td>発表／質疑応答</td>
<td>掲示レポートに関する発表会</td>
</tr>
<tr>
<td>(最終報告）</td>
<td>発表／質疑応答</td>
</tr>
<tr>
<td>レポート提出</td>
<td>添削レポートの送部／レポート</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>改善ワークショップ</td>
</tr>
<tr>
<td>[ 特徴：スキルの教授＋個人の経験学習 ]</td>
<td>最終レポート提出</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>[ 特徴：プロセス学習＋協働学習 ]</td>
</tr>
</tbody>
</table>

- 52 -
削アシスタント育成プログラム」の2つの要素から構成されていることである。
まず、ライティング・プロセス中心の協働学習ワークショップとは、ライティング・スキルを4つのプロセス、つまり①テーマ内容の調査、②調査内容をふまえたレポート作成、③レポート内容のプレゼンテーション、④プレゼンテーションや添削レポートをふまえたレポートの改善、に分けて、それぞれのプロセスを受講生が経験学習と協働学習を通してレポートを作り上げていく構成になっている。今回の改善において重視したのは、受講生が一番苦労しているテーマ発見を促すことである。図書館との連携によるテーマ内容の調査法の学習と実習時間を設け、受講生には、大学図書館がもつコンテンツがテーマ内容の調査とテーマ発見にとって有効であることを認識させるようにした。また、授業全体を通して受講生自身の成果物を振り返る機会を設け、受講生自身が改善点を認識し、改善方法を考え、実際に改善していくという主体的な学びを促すようにした。
次に、レポート添削アシスタント育成プログラムは、上級生を受講生のレポート添削の補助要員として利用するために開発した。アシスタント学生は、まず、レポート添削やゼミ論文、卒業論文で役立つライティング・スキルに関する講習を受講し、その後、実際に提出された受講生のレポートの添削を実施している。プログラム開発には、大学教育機能開発センターなどの学内の関連機関と協働した。

3．ライティングの段階的指導プログラムの成果
この取り組みを通じた成果について、2012年度以降3年間にわたり実施した聞き取り調査および授業評価アンケートをふまえて明らかにする。
経験を通じて成果を認識するライティング学習は、最終的な成果が即座に発ずるものではないものの、受講生は、レポートにおいて図書文献を調査し、主体的な学びの意義を探求できるようになっており、レポート添削を補助した上級生は、ライティング・スキルを修得する意義をより深く認識できるようになっている。この点で、このプログラムはライティング・スキルを効果的かつ効率的に身につけさせる方法であったといえよう。そして、ライティング・スキルの意義は、レポート添削の取り組みを通して深く認識されていることをふまえると、ライティング学習を段階的に構築する必要があろうことが明らかになった。さらに、ライティング学習においては、レポートを添削することが非常に効果的かつ効率的に身に付けさせる方法であることも明らかになった。
こうした成果や課題をふまえ、現在、新潟大学では、経済学部経営学科において初年次教育の次段階でのライティング授業の開発が計画され、さらに図書館においては添削アシスタント育成プログラムが計画されることにながっている。

主要参考文献
井下千恵子 (2008)『大学における書く力を考える力』東信堂。
関西地区 FD連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター編 (2013)『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房。
佐渡島紗織・太田裕子編 (2013)『文章チュータリングの理念と実践』ひつじ書房。
近田政博 (2013)『国際論文の書き方入門』の授業実践』『名古屋高等教育研究』第13号、103-122頁。